

図式的投影法を用いた母親の家族認識 (5)

— 現在の子どもと夫に対する感情 —

Mother's Perception of Her Birth Family Using Schematic Projective Techniques (5)

— Mother's Emotions to Child and Husband at Present —

小林 麻子*・会沢 信彦**

Asako KOBAYASHI, Nobuhiko AIZAWA

要旨：女性が家族体験を通して母親になっていく過程を主観的に捉えるため、3～5歳の子どもをもつ母親8人を対象に、母親の幼少期から現在まで人生のステージごとに場面を設定し、図式的投影法を使って面接調査を行った。前報の思い通りにならない育児場面に引き続き、本報では現在の子どもや夫に対する感情について調査を行った。育児場面では子どもに対して怒りや悲しみを感している母親だが、現在の子どもに対しては多くの母親が肯定的な感情を表し、将来への期待や成長の喜びなどを語った。しかし、子どもの自己主張が強く、夫の支持が得られない母親は家族の中で孤立し、子どもに対して肯定的な感情を表すことが出来なかった。夫に対する感情では、夫の育児協力、夫の家事協力、夫の理解と支持が母親の感情に影響を与える要因になっていた。

キーワード：図式的投影法 母親の子どもに対する感情 母親の夫に対する感情

1. 問題と目的

本研究は、女性が家族体験を通して母親になっていく過程を、図式的投影法を用いて主観的に捉えようとするものである。図式的投影法は、体験と意識といった主観的世界を含む人間全体にアプローチしようと水島により考案された、概念領域からイメージ領域を含んだ投影法である(水島, 1979)。図式は現実世界の論理的概念的な理解と解釈を含み、同時にそのように理解された世界に対する感情、被験者自身の様々な欲求を含む(上杉, 1984)。家庭に生まれ、家族に育てられた女性はやがて親元を離れ自らの家庭を築き、母親となって子どもを育てる。本研究では、こ

* こばやし あさこ 文教大学生生活科学研究所客員研究員

** あいざわ のぶひこ 文教大学教育学部

のようなライフサイクルの中で、母親が感じていることを図式で表現してもらおう。第一報（小林・稲越・会沢, 2009）では、幼少期から青年期の家族関係の変化が図式にどのように表現されているのか分析した。第二報（小林・稲越・会沢, 2010）では、成長とともに変化する家族に対する意識や両親への感情を、駒どうしの距離をもとに分析した。第三報（小林・会沢, 2011）では、結婚、妊娠、出産を通して母へと変化していく意識や夫との関係を分析した。そして第四報（小林・会沢, 2012）では、思い通りにならない育児の中で、母親が体験している感情や家族の対応への評価を分析した。

出産すれば誰もがすぐよい母親になれる訳ではない。思い通りにならない育児に翻弄され、子どもに否定的な感情を抱くこともある。期待に応えてくれない夫に怒りや悲しみを感じることもある。こうした感情と何とか折り合いをつけながら女性は母親になっていく。本報では、現在の子どもや夫に対して母親がどのような感情を持っているのか、また、夫の協力が母親の感情にどのような影響を与えるのかカード式自己像単純図式を使って分析する。母親は育児の中で身体的にも精神的にも大きなストレスにさらされる。その中で母親を支えているものや母親が求めているものを考察する。

2. 方法

(1) 調査協力者

東京の私立保育園の父母会と東京近郊の育児グループに依頼。応じてくれた3歳～5歳の子どもをもつ母親8人を対象にした。

(2) 調査期間および実施場所

実施期間は2000年9月から11月にかけて。実施場所は調査協力者の都合に合わせたため、調査協力者の自宅、調査者の自宅、本大学院の実習室となった。

(3) 調査方法

i) 家族関係単純図式投影法

直径2cmの円形の駒を家族の人数分用意し、家族の構成員の名前を記入する。B5判の白紙縦に直径10cmの円枠（家族の枠）を作り、家族の駒をそれぞれ自由に移動させながら「ピッタリ」と思える位置に置く。

ii) カード式自己像単純図式（自己像単純図式に感情カードを併用した複合図式）

B5判の白紙縦に上部が開いた直径10cmの円枠を作り、円枠の上部2cm上に対象カードを置く。直径2cmの円形の駒を自己の核とし、対象に対して「ピッタリ」と思える位置に置く。さらに感情語（Pulchik, R.の感情8語を漢字1文字に置き換えたもの「喜、悲、望、恐、愛、嫌、怒、驚」）を用いる）が記された2cm四方の感情カードを、その対象に対して配置する。

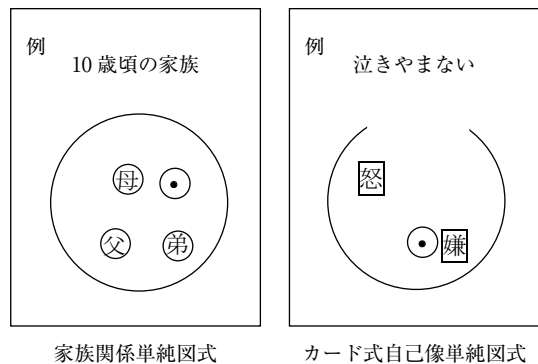


図1 調査で使用した図式

(4) 手続き

図式的投影法では、人生のステージごとに質問項目を設定し（表1）、その項目を対象カードとして家族関係単純図式、あるいはカード式自己像単純図式を作成してもらった（図1）。実験者は被験者に「(対象に対して)駒を自由に動かして、自分がピッタリすると思えたら、そこにのりづけして下さい。」と指示する。図式作成後に当時の家族の様子を語ってもらう。質問は幼少期から現在まで時系列に提示する。本報では、ステージ6 現在の夫と子ども（カード式自己像単純図式）を対象にする。

表1 質問項目一覧

ステージ	質問項目	ステージ	質問項目
1 子どもから青年期	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと同じ年頃の家族 ・10歳頃の家族 ・18歳頃の家族 ・18歳頃 母 ・18歳頃 父 ・青年期の友人 	4 幼児期(2歳頃～5歳前後)	<ul style="list-style-type: none"> ・なかなか寝てくれない ・ぐずぐずする ・飛び跳ねたり叫んだり暴れたり ・私の言った通りやってくれない ・かんしゃく ・おもらし
2 結婚から出産	<ul style="list-style-type: none"> ・新婚時代 ・妊娠を知った時 ・妊娠後期 ・子どもが産まれた時 	5 第二子以降	<ul style="list-style-type: none"> ・第二子以降の妊娠を知った時 ・第二子以降の出産後
3 乳児期(0歳～1歳前後)	<ul style="list-style-type: none"> ・初めて目が合って微笑んだ時 ・どうしても泣きやまない ・私の作った離乳食を食べてくれない ・後追い／抱っこ 	6 現在	<ul style="list-style-type: none"> ・夫 ・子ども（ひとりひとり） ・現在の家族 ・理想の家族

3. 結果

調査に協力してくれた母親のプロフィールは表2の通りである。母親の作成した現在の子どもに対するカード式自己像単純図式を図2に、現在の夫に対するカード式自己像単純図式を図3に示す。なお、現在の子どもと夫に対してAだけ調査方法が異なっている。Aは初回の被験者で、Aの面接施行後、調査方法の修正を若干行なった。Aには自己像単純図式を作成してもらい、感情カードは使用しなかった。

表2 母親のプロフィール

	年齢	原家族	職業 結婚前／現在	現在の家族
A	30代前	父・母・妹(3歳下)	教員	夫・長男(7歳)・長女(5歳)・次男(0歳)・姑
B	30代前	父・母・弟(3歳下)	看護師／教員	夫・長男(4歳)・次男(2歳)
C	30代中	父・母・弟(4歳下)	会社員／なし	夫・長女(3歳)
D	30代中	父・母・妹(双子)	会社員／会社員	夫・長女(4歳)
E	30代前	父・母・妹(3歳下) 弟(8歳下)	会社員／なし	夫・長男(3歳)・長女(3歳) *双子
F	20代後	父・母・長兄(4歳上) 次兄(2歳上)・祖父・祖母	なし／学生	父・母・次兄・長女(3歳)
G	30代後	父・母・弟(3歳下)	会社員	夫・長女(3歳)
H	20代後	父・母・妹(3歳下)	会社員	夫・長女(4歳)・長男(2歳)

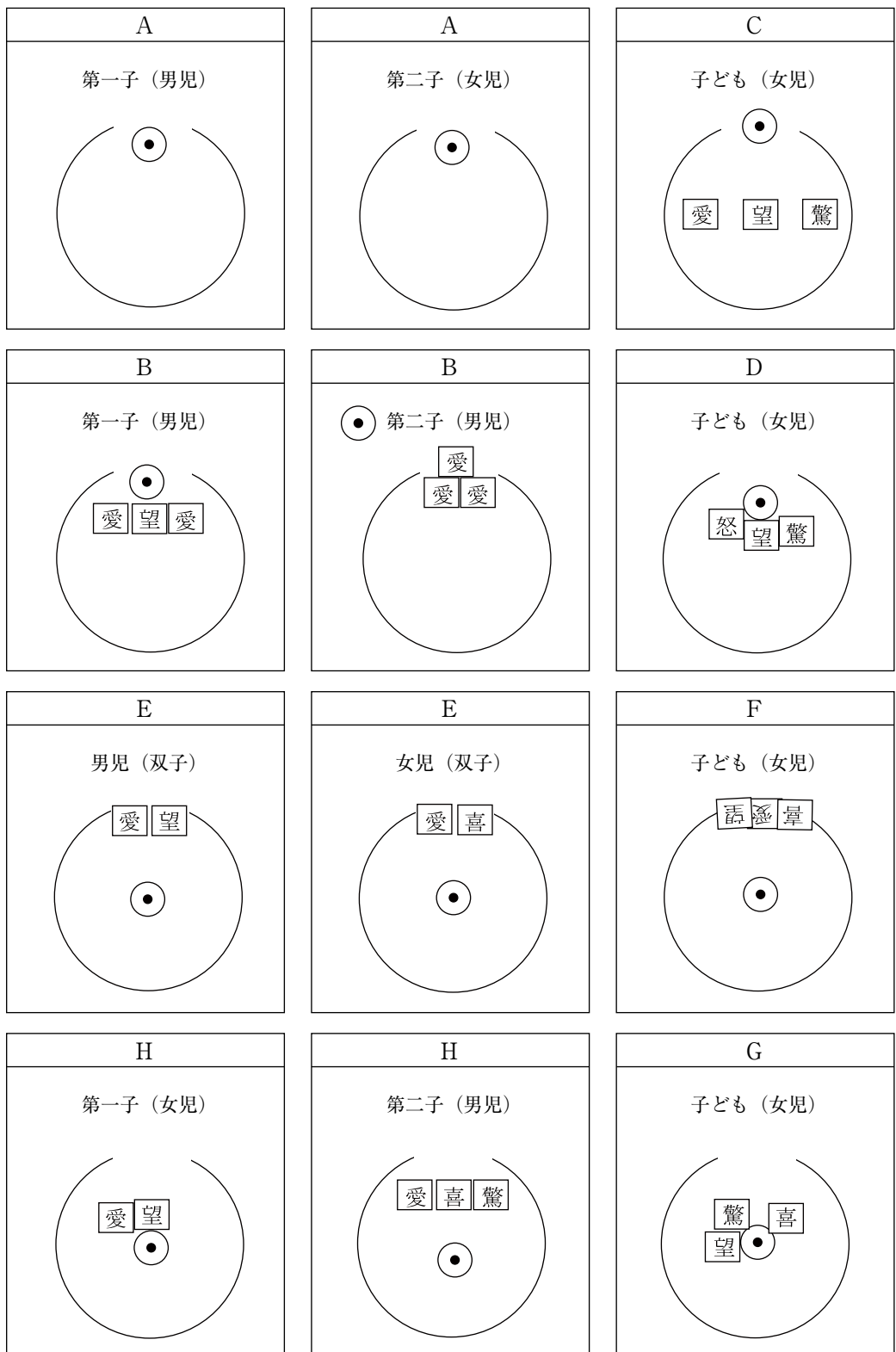


図2 母親の作成した現在の子どもに対する図式

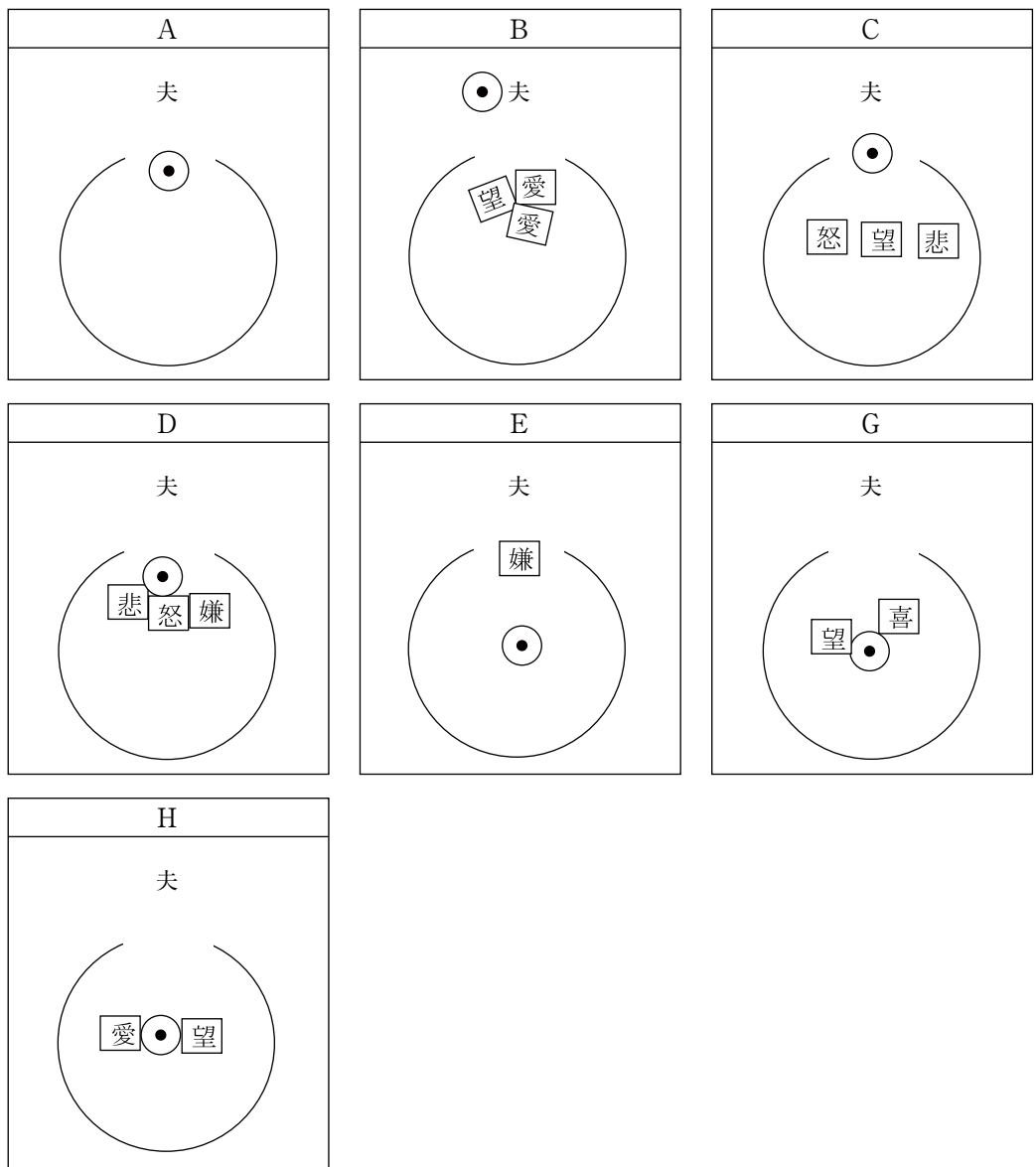


図3 母親の作成した現在の夫に対する図式

(1) 現在の子どもに対する感情

母親の使用した感情カードおよび、図式の説明の要約を表3に示した。Aを除く対象児8人に母親が使用した感情カードは「望」「愛」「喜」「驚」「怒」である。「望」は7人の子どもに使われているが、C、E（男児）、F、Gが子どもの将来への期待であるのに対し、B、D、Hは現在の子どもに対する希望、要望であった。「愛」は6人、「喜」は3人の子どもに使われている。「愛」「喜」のどちらも使用しなかったのはDである。「驚」は3人の子どもに使われている。CとGは子どもの成長に対しての驚きであるが、Dは思い通りにならない子どもに対して途方にくれる状態を「驚」で表していた。「怒」を使用したのはDのみである。Aは感情カードを使用しなかったが、図式の説明で子どもに対する愛情を語っている。

子どもに対して全面的に肯定的な感情を表したのは、A、C、E、F、Gであった。Aは兄を育てる時、愛情をたくさん注がないと子どもは自分から離れてしまうと思っていたが、娘を育てる中でそんなことをしなくても子どもは母親のところに来るという自信を得た。C、E、Gは子どもへの愛情や将来への期待、成長に対する驚きや喜びを語った。離婚を経験したFは、子どもがいることで自分が強くなったと感じている。愛情とともに協調性を持ってほしいという要望を語ったのはHである。Bは第二子に手がかかり、子どもの要求を拒否することが多かったため、子どもはBに心を閉ざしている。Bは子どもに近づこうと努力している。子どもに対して否定的な感情を表したのはA（兄）とDであった。Aは片付けや学校の用意ができない兄に対して今までにないイライラし、精神的ストレスになっている。Dは子どもへの激しい怒りや悲しみを語り、肯定的な感情カードを使用しなかった。

きょうだいについては、該当するA、B、Hの3人が「愛情は変わらないが下の子は可愛い」と語っている。また男女の差については、該当するA、E、Hの3人が「男児の方が甘えてくる」と語り、E、Hは異性であることを意識している。

(2) 現在の夫に対する感情

母親の使用した感情カードおよび、図式の説明の要約を表4に示した。A、Fを除く6人の母親が使用した感情カードは「望」「愛」「怒」「嫌」「悲」「喜」である。「望」は4人が使用しているが、C、Gが将来の希望であるのに対し、B、Hは子どもへの対応についての要望であった。「愛」はBとH、「喜」はGが使用した。「怒」「悲」はCとD、「嫌」はDとEが使用した。Aは感情カードを使用しなかったが、図式の説明で夫への信頼を語っている。

CとGを除く母親が家事や育児に関わることを語った。Cは実家に対する夫婦の考え方の違いについて、Gは夫の性格について語った。夫に対して肯定的な感情を表したA、B、G、Hは、いずれも仕事を持っている（Aは産休中）。一方、夫に対して否定的な感情を表したC、D、Eは、Dが共働き、CとEが専業主婦である。夫に肯定的な感情を表したA、B、G、Hのうち、B、Gは家事も育児もほぼ同等に分担している。Bは以前、仕事が忙しくて夫が育児を手伝えなかったことに強い不満を持っている。しかし、現在は家事も育児も協力的なので許している。共働きであるにもかかわらず、夫が家事をしないのはAとHである。Aは夫が普段は何もしてくれないが、困った時には頼りになると感じている。Hは亭主関白の夫が育児はしてくれることを評価している。Hの仕事上、夫は子どもの世話をする日が多い。夫は子どもにはとても寛容で、Hは教えられることが多いと感じている。A、Hとも家事を夫に期待していないが不満はある。

表3 現在の子どもに対する図式の説明（カード式自己像単純図式）

	感情カード	内容	
A	子（5歳女児）	—	兄の時は、もっと愛情、愛情とやっていたかもしれない。それをしないと母親から離れちゃうと思って。そんなにななくても、結局子どもって母親のところに来るじゃないと、娘の時の方がより強く思った。男の子の方が「お母さん」っていうのが強くて愛情に敏感なのかもしれない。
	兄（7歳）	—	子どもはかわいい。しかし今が一番イライラしている。明日の支度とか片づけといった些細なことができないとキレそうになる。言葉で支配しようとしているのはわかっている。
	弟（0歳）	—	赤ん坊はかわいい。だから、この子が一番、全面的にかわいいと思っている。赤ん坊って楽しい。もうこんなに大きくなっちゃたの！もう少し小さくていいよって。
B	子（4歳男児）	愛・望・愛	弟が産まれて2年間の溝がある。自分の子だから愛情はあるので、近づくように努力はしている。この子はどういう思考をしているのか、どう関わっていったらいいの真剣に考えてしまう時がある。子どもに近づきたいが、今は子どもが心を閉ざしている。夫には打ち解けている。
	弟（2歳）	愛・愛・愛	本当は上の子をよしよししてあげなくてはいけなかったが、体が弱くて弟にばかり気がいっていた。弟は後追い、人見知りをした。今もベタベタしてくる。上の子は私がうるさかったのであまり来ない。2歳の時は赤ん坊を抱えて来られても困った。弟は手をかけた分かわいい。
C	子（3歳女児）	愛・望・驚	将来どういうふう育てたいという希望。本人がやっているのを見て、驚きもあるし、かわいいというのもあるし、そのままという感じ。
D	子（4歳女児）	怒・望・驚	道路の飛び出しとか、いくら注意しても止めない。その場で叱って顔を叩く時もある。毎回言い聞かせているのに、もうどうしてなんだろうという驚き。私の気持ちをわかって変わって欲しい。普段は「ママいなくてもいい」と言うが、寝る時は「ママと一緒にいい」と言う。そういう時はやっぱり母親が一番なのかなと思う。それ以外はパパ。例えば風呂上がり、私が体を拭こうとすると「やめて！パパがいい」「ママはあっち行って！いなくなつて！」やっぱり悲しい。その時は怒りよりもどうしてなんだろう。母親の私に対してどういう気持ちでいるのかなと。
E	子（3歳男児）	愛・望	将来どんな青年になるのか想像がふくらむ。どうせなら恰好よくなって欲しい。そういう意味で娘とは違う希望。娘は大人になってもずっとそばにいてくれるかなというお友達感覚だが、息子は恋人以上の存在。夫は比べものにならない。子どもではあるけれど、一人の人間であることを忘れないようにしておかないと。いつか巣立っていく人達なので。
	子（3歳女児）	愛・喜	この世に一人しかいない、誰とも比べようがないかわいい存在。大きくなったら一緒にお買い物やおいしいものを食べに行きたい、そういう期待を女の子にはしてしまう。服を着せてもかわいい、女の子は花のような存在。扱いにくいけど性格がかわいい。不憫な思いをさせた分、もっとかわいがってあげたい。美人ではなくても、ある程度かわいくなって欲しい。だから私が一生懸命かわいいかわいいと言ってあげたい。娘は言われると大満足。そんな娘がおしゃまでかわいくて。
F	子（3歳女児）	愛・望・喜	前に出すぎもせず下がりもせず、という気持ちで接している。子どもは私にとって希望であり喜びであり、一緒にいられることがとてもうれしい。これほど、自分では愛している存在はないと思う。離婚した時にはこの子がいることで自分が強くなった。自分を全身で頼ってくれる存在がいると、それだけでも私は救われる部分があった。
G	子（3歳女児）	喜・望・驚	驚くことが多い。こういう動きをしたり、こういうふうに見えるとか、その記憶力の多さとか。今だったら何にでもなれそうな気がするので、いろんな望みを持つのもいいと思う。そういうものを見ればうれしいので喜び。
H	子（4歳女児）	愛・望	この子が産まれていなかったらどうなっていたのか。女の子はいらないと言っていた夫だが、この子が産まれて変わった。影響力がある。この歳にしては何でも自分でできるので、このまま大きくなってもらいたい。自己中心的なところがあるので、もう少し協調性を持って欲しい。
	弟（2歳）	愛・喜・驚	息子には驚かされることが多い。甘えて来るし、異性だから母親から見たらめっちゃめっちゃかわいい。愛情は姉弟同じだが、個人的な感情では、姉にはこう育てて欲しいという母親の念が強い。男の子は今のままかわいくいて欲しい。変に大きくなって欲しくない。

表4 現在の夫に対する図式の説明（カード式自己像単純図式）

	感情カード	内容
A	—	最近子どものことでイライラして精神状態が不安定だと言ったら、夫はやさしくなった。
B	愛・望・愛	下の子が3～4ヶ月の頃は嫌だった。帰日も遅くて、子どもが泣いていても疲れて動けなかった。そういう時はあったが、下の子も大きくなったから許している。お父さんはそんなつもりなかったのかもしれないが、私の中では嫌だった。一緒にいたくなかった。この役立たずで思っただも2人も大きくなって対話時間も増えたし、やり方はどうあれ、育児に対しては協力的だし。ただ、しつけをもうちょっとやって欲しい。メリハリつけて怒る時はもうちょっと怒って、遊ぶ時はいっぱい遊んで欲しい。
C	怒・望・悲	何がというわけではない。お互い解決できないことは解決できないし。怒はやっぱり実家だろうか。そこが大きい。他人同士だから100%分り合えないのは分かっているながらも、たまに悲しい。でも温かい家庭を築きたいし望みはあるから、嫌という理由にはならない。
D	怒・嫌・悲	私との距離がある。私の話は聴いてくれるが、私がいつも口うるさく言うから子どもが言うことをきかなくなったりとか、出来ることもしないとか言われると、一体何がわかっているの！と怒りがこみ上げてきて、本当に嫌になる。分かって欲しいのに分かってもらえないので悲しい。
E	嫌	愚痴を言えざきりが無い。いつもテレビ、新聞、ファミコン、競馬で、私や子どもたちが何をやっているか見ていないことが多い。私が言わないと動かないところが嫌。やってくれても面倒くさそうに言われると、お願いした後で嫌な思いをすることも。家事が一切できないところが嫌。自分は趣味をいっぱいやっているくせに、土日は競馬があるからどこにも連れて行ってくれないし。
G	喜・望	恋愛して好きだったところがそのままの状態。誤解がなかったのうれしい。思った通りの人だった。私は帰国子女で、察するというのがわからない。夫はやって欲しいことはそのまま言ってくれるのでわかりやすい。もっと研究者として大成して欲しい。
H	愛・望	夫は自分と性格が全く違い、自分にはないものを持っているので教えられることが多い。私が仕事の時、夫は子ども達を家の中で勝手に遊ばせるだけなので外に連れて行ってあげて欲しい。夫が子どもをこんなにかわいがる人だとは思わなかった。子どもが産まれた時は、子どもが泣くと怒られると思いを使っていたが、子どもの事なら怒らないことが今になってわかった。

夫に対して否定的な感情を表したDは、共働きであるのに家事をせずDの育児の苦勞を理解しようとしないう強い怒りと悲しみを感じている。専業主婦のEは夫に家事や育児を期待していないが、Eが双子の世話に追われて手が足りない時でも、夫は趣味をやっていて手伝おうとする気がない。Eは家族に無関心で父親の役割を果たさない夫にイライラしている。Cは夫の両親との問題で、夫が何もしてくれずCの気持ちを理解しようともしてくれないことに怒りと悲しみを感じている。

4. 考 察

(1) 現在の子どもに対する感情

幼児期の子どもを抱える母親は、日常生活のいたるところで子どもの自己主張と衝突し振り回される。前報（小林・会沢, 2011）の育児場面における母親の感情では、子どもを愛おしく感じたり、イライラしたりウンザリしたりしている母親の複雑な感情が語られた。本報では、こうした状況が進行する中、現在の子どもに対して母親がどのような感情を持っているのか図式に表現してもらった。多くの母親は肯定的な感情カードを使用し、子どもへの愛情や将来への期待、子どもの成長に対する驚きや喜びを語った。その一方、Aは7歳の兄へのイライラした感情を、Dは子どもへの激しい怒りや悲しみを語った。Dは肯定的な感情カードを使用しなかった。

Aは兄が片づけや学校の支度をしないことでイライラしている。Aは些細なことができないとキレそうになると語っているが、小学生になった兄は自分の小遣いの使い方に干渉するAに反発している（兄へのインタビューで語ってくれた）。Aが気づいているかどうかは不明だが、

兄の怒りは様々な形で A に向かうので、A は子どもへの怒りを消化できずに苦しんでいる。D の場合、子どもは非常に自己主張が強く、自分の欲求を通すためには道路でも寝転んで泣き叫ぶ。衝動性が高く、いきなり道路に飛び出す。D の見てない隙に生卵を割ったり、麦茶を床にぶちまけたりする。日々大きなストレスを抱えて育児する D は、苦労を夫に理解してもらいたい。しかし、夫からは「そうなるのはいつも口うるさく言うからだ」と非難され、子どもからは「パパ大好き」「ママは消えて」と拒絶されてしまう。氏家（1996）は、子どもが非常に育てにくかったり、夫や家族の理解や協力が得られなかったりすることは、母親が上手くできない自分を再確認するような現実知覚＝行動様式の発達を促進させる要因になると述べる。子どもが育てにくいと母親は子どもをコントロールできず、自分や子どもに苛立ったり、自分はダメな母親だと思ってしまうかもしれないし、家族の理解が得られないと母親は孤立して、ストレスやうまくできないことに過剰反応しやすくなるという。D は言うことをきかない子どもに激しい怒りや悲しみを感している一方で、同じ年の子ども達が落ち着いてくる中、自分の子どもだけが変わらないことに焦りを感じている。しかし、夫は子どもの行動を肯定的に捉え、時には支持することもあるので、D は「やっぱり私の話は聞いてくれないんだ」と孤立感をますます深めてしまう。尾形（2003）は夫婦間のコミュニケーションが母親の孤立感や自己閉塞感の軽減に関与すると述べる。兄の反抗に苦しむ A の話を聴いた夫は急に A にやさしくなった。夫は理解してくれていると感じた A には、兄にイライラしながらもそれとは別に兄の良い面を語れる余裕がある。

子どもに攻撃された母親は子どもに否定的な感情を抱くが、母親は子どもに大いに傷つけられながら、子どもに報復しないで大いに憎んだり、後日あるかもしれないしなくてもいい報酬を待つことができると Winnicott（1975）は言う。多くの母親は子どもに傷つけられても「今はまだ仕方ない」とか「いずれわかるようになる」と思って自分の怒りを受け入れることができる。母親の心に余裕があれば、憎しみを遊びの中で子どもにぶつけてそれを子どもと一緒に楽しむこともできる。しかし、子どもの憎しみがあまりにも激しかったり、母親を支えてくれる家族がいなければ、母親は子どもの攻撃に傷つき、自分の怒りを受け入れる余裕がなくなってしまうかもしれない。

今回の図式では、母親の子どもに対する愛と憎しみの両面が表現された。母親の愛が大きい分、憎しみもまた大きいものであった。子どもとの関係が良好な時、母親は育児を楽しみ子どもの将来に希望を持つことができる。しかし、子どもとの関係に問題が起きますと、母親は子どもに対する否定的な感情に苦しんだり育児に自信を失くしたりして、大きなストレスを抱えることになる。A は夫が話を聴いてやさしくしてくれたことで、憎しみを受け入れる余裕ができた。一方、D は夫が自分を支持してくれないので、憎しみを正当化することができずますます苦しんでしまう。社会では母親の愛ばかりが強調され、子どもに憎しみを抱くこと自体に罪悪感を持つ母親も少なくない。しかし、育児には数多くの親子の葛藤が含まれる。そして、母親の憎しみは子どもの自立にとって欠かせない要素である（Winnicott, 1965）。母親の子どもに対する憎しみを肯定的に捉え、母親がそれを受け入れられる環境を整えることは、母親の子どもに対する感情や母子関係の改善につながるものと考えられる。

（2）現在の夫に対する感情

現在の夫に対する感情では、育児や家事に関わる話をした母親が多く、夫の育児協力、夫の家事協力、夫の理解と支持が母親の感情に影響を与える要因になっていた。夫の育児協力は、母

親が夫に父親としての役割を期待するものでもある。夫の育児協力については、Eを除いて大きな不満を語った母親はいない。前報（小林・会沢, 2011）の調査でも、E以外の母親が夫の育児参加を普通から多いと評価している。Hは夫が子どもをとてまかわいがることに肯定的な感情を表している。Eは夫が子どもに無関心であることに否定的な感情を表している。夫の家事協力は、母親が夫に対等な夫婦関係を期待するものである。夫の家事に対する姿勢は、夫の夫婦観を表している。夫が夫婦は対等であると考えたら、夫は家事を分担するだろう。しかし夫が夫婦は対等であると考えていなければ、夫は妻だけが家事をすることに疑問を持たない。共働きのA、D、Hは夫が家事をする気のないことに不満を持ち、Dは否定的な感情を表している。夫の理解と支持は、夫が妻の気持ちを理解し、妻の立場を支持してくれることを期待するものである。Aは育児や仕事の悩みを聴いてくれる夫に肯定的な感情を表している。Cは夫の両親の干渉が嫌なことを夫に訴えるが、夫は理解してくれず、夫に否定的な感情を表している。Dは育児の苦労を認めてくれない夫に否定的な感情を表している。

共働きのBとGは、夫婦で家事と育児をほぼ同等に分担している。BとGにとって夫は共に生活し子どもを育てていく対等なパートナーである。夫が積極的に家事や育児に加わり母親をサポートしてくれることで、母親は夫に対する信頼感や支えられている安心感を得ることができる。多くの母親は夫婦が協力しながら子どもを育てる家庭、夫婦が対等でどちらか一方だけが何かを押し付けられることのない家庭を望んでいる。しかし、BやGの夫は少数派で、現実には家事や育児の大部分を母親が担っている。夫の協力や支持は母親に自信や安心感を与えるが、それが得られないと母親は傷つき、夫に不信感を持ったり、孤立感を深めたりしてしまう。

引用文献

- 小林麻子・稲越孝雄・会沢信彦 2009 図式的投影法を用いた母親の家族認識（1） — 原家族に対して — 文教大学生生活科学研究, 31, 285-294.
- 小林麻子・稲越孝雄・会沢信彦 2010 図式的投影法を用いた母親の家族認識（2） — 青年期の家族関係 — 文教大学生生活科学研究, 32, 99-108.
- 小林麻子・会沢信彦 2011 図式的投影法を用いた母親の家族認識（3） — 結婚、妊娠、出産を通して — 文教大学生生活科学研究, 33, 147-156.
- 小林麻子・会沢信彦 2012 図式的投影法を用いた母親の家族認識（4） — 育児場面における母親の感情と家族への評価 — 文教大学生生活科学研究, 34, 79-90.
- 水島恵一 1979 「体験と意識」研究の方法論 体験と意識に関する総合研究第1集, 1-8.
- 尾形和夫 2003 父親の育児と子ども — 育児は夫婦関係と父親を変化させる — (柏木恵子・高橋恵子 編 心理学とジェンダー 学習と研究のために) 有斐閣 pp. 44-51.
- 上杉喬 1984 図式投影法とイメージ (水島恵一・小川捷之 編 イメージの臨床心理学) 誠信書房 pp. 190-196.
- 氏家達夫 1996 親になるプロセス 金子書房
- Winnicott, D.W. 1964 *The Child, the Family, and the Outside World Part One: Mother and Child.* Harmondsworth, Middlesex, England: Penguin Books. (猪股文二 訳 2007 子どもと家族とまわりの世界 (上) 赤ちゃんはなぜなくの — ウィニコット博士の育児講義 — 星和書店)
- Winnicott, D.W. 1965 *The Maturation Processes and the Facilitating Environment.* London: Hogarth Press. (牛島定信 訳 1991 情緒発達と精神分析理論 岩崎学術出版)
- Winnicott, D.W. 1975 *Collected Papers: Through Paediatrics to Psycho-Analysis.* New York: Basic Books; London: Hogarth Press. (北山修 監訳 1995 児童分析から精神分析へ ウィニコット臨床論文集II 岩崎学術出版)